



全国私教連養護教職員連絡会 ニュース

2018年3月発行 第7号



例年になく寒さが厳しい冬、豪雪の被害に遭われた方には心からお見舞い申し上げます。

インフルエンザも大流行していた中で、冬季オリンピックでは真のスポーツマンシップを感じられる感動的なシーンもありました。皆様は、いかがお過ごしでしょうか。

気が付くともう3月の年度末、次年度の準備に気持ちも落ち着かない頃になりました。

新たに出会う子どもたちは、どんな子どもたちだろう。子どものいのちと健康を守り発達を保障する重要な役割、教育に携わっている養護教諭と保健室の役割を発信していく年にしたいものです。

文部科学省と懇談会をおこないました

11月20日に、文科省との懇談会をおこないました。これまで、全国私教連養護教職員連絡会として3年にわたり「交渉」を申し入れてきましたが、いつも「ゼロ回答」で意気消沈してきました。4年目になる今回は、「懇談」を申し入れて、養護教諭の定数のみではなく具体的な私学の実態について項目を追加しました。すると、今回はそれぞれの質問項目に対しての担当者が出席し、6人の方が懇談に出席しました。全国私教連からは、永島委員長と書記の立石、養護教職員連絡会から磯村（愛知）・荒井（埼玉）・若杉（大阪）・古川（大阪）が出席。

ようやく全国私教連養護教職員連絡会というものの存在を認知されたのかという感触はありました。やっと、スタートラインに立ったというところでしょうか。文科省は「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～」という冊子を全国のすべての学校に配布していますので、養護教諭の役割を十分に認識しているはずですが、私学への「周知徹底」について、文科省からの回答が特に前進したということはないのですが、各都道府県の担当者会議は、毎年2回はおこなわれていることだけはわかりました。

今後は、労働組合として、私学の子どもたちや養護教諭について具体的な実態を把握して、文科省にも各都道府県の私学振興担当者にもプレッシャーをかけていく必要性を感じました。

国会議員懇談について

今回は、初めて「議員への要請書」を作って議員懇談を計画していましたが、あいにく衆議院が解散して10月に総選挙となり、ちょうど衆議院の会期に重なったこともあり、吉良よし子参議院議員（日本共産党）と吉良・畑野両議員の秘書とお会いすることができました。

私学の子どもたちの実態と養護教諭の配置について、幅広く知らせる「運動」にしていくこと、全会派の全議員に要請することなどが、今後の課題です。



全国私教連養護教職員連絡会の今後の予定

- 3月25日（日）16時～ 事務局会議・・・どなたでも参加できます！
- 7月28日（土）～30日（月）妙高赤倉温泉全私研 17分科会レポート絶賛募集中
- 7月28日（土）19時30分～養護教職員交流会
- 11月中旬の平日 文科省懇談、議員懇談



『ルポ保健室』をご存知ですか？

文科省・議員懇談と同日に、『ルポ保健室』の著者でフリージャーナリストの秋山千佳さんに私学の現状を伝えました。秋山さんは、『ルポ保健室』の中で、保健室を訪れる子どもたちの実態とともに子どもたちに寄り添い関わる養護教諭の姿を書いています。全国養護教諭サークル季刊誌『保健室』にも連載されていて、『保健室』月号に常勤講師の養護教諭の雇止めと単位制の高等学校で学校設置基準の適用外であることが言及されていました。私たちは、改正労働契約法の「5年以上の雇用で期限の定めのない雇用」を阻止するための脱法行為が多発していることや私学の養護教諭配置の問題点について伝えました。（『保健室』2018年2月号に掲載されています。ぜひお読みください。）

教育は、継続的な営みです。毎日子どもたちと関わっているからこそ、微妙な変化に気づきません。教職員と連携するには、会議はもちろんですが日常的なコミュニケーションが欠かせません。養護教諭が不安定雇用で貧困や虐待、自殺企図など困難な課題にぶつかったときに、どうやって子どもを守るのでしょうか。保健室と養護教諭について関心を持つジャーナリストの存在がとても心強く感じられます。と同時に、私たち自身が自分たちの仕事について発信する必要性を改めて感じます。

第22回全国青年 winter セミナー in 宮城 第9分科会「養護、特別支援教育」 2018/01/07(日)

ウインターセミナーで第9分科会は多くの参加があり、全国私教連養護教職員連絡会の世話人でもある藤井先生が助言者として参加しました。藤井先生からの報告です。

こちらの分科会では性教育について2本のレポートが発表されました。1本目は愛知の東邦高校、川上先生の「性教育の日 実践報告」。20年以上続いてきた性教育の実践を若手の先生が引き継ぐ中で、見えてきた課題は「校内のネットワークが不可欠」ということ。NPO 法人アスクネットに依頼してコーディネートした、一貫したテーマをもった性教育実践は始まったばかりですが、生徒に共通したメッセージを伝えることができ、大変興味深い内容が伺えました。2本目のレポートは熊本中央高校の城戸先生の「外部講師が行う性教育講話」。あえて性教育と言わず「ライフスキル教育」と名付け、いのちとは、自尊心とは、といった内容からアプローチする講話を、まずは身近にいる味方だった家庭科の先生と協力して進めて行くこと、悩みながら各方面と連携して行く様子がとてもリアルで、思わずウンウンと頷いてしまうものでした。レポートの後も熱心な討議が続き、デートDVやLGBTに関しての取り組みなど、各学校での実践がたくさん聞けました。中でもとても印象的だったのは、「発達障害により、強くこだわりを持つ男子は、DVになる可能性がある」というものでした。聞いてみるとなるほど！と思うことが多く、更には男子に限らず女子にも「コミュニケーションが下手で、優しくしてくれる人に強くこだわり粘着しがち」というパターンもあるのではないかと気付きました。セクシャルマイノリティーに関する対策も各校色々で、自分の学校は遅れているので、何とか動かないといけないなと感じました。性教育も命の教育も、やはり苦労するのは「味方が少ない」「教員に重要性を理解している人が少ない」ところで、少数部署の養護(保健室)がどう動いていくかというところで、外に出て「こうしてみたら」「うちはこんな方法でやってみただけ」という話をするのがとても重要だと感じました。討議終了後には、会場であった尚絅学院の保健室も見学させていただきました。真っ白で真新しい保健室に、隣が相談室という羨ましいほどの環境で、なかなか見ることのない「他の人の保健室」にとっても勉強をさせてもらいました。ひさしぶりの winter セミナー参加でしたが、若手の先生方が生き生きと活動して居る様子にとっても元気をもらえました。

瀧野川女子 藤井 朝

編集後記

年末から養護教諭の雇止めの相談が相次ぎました。みな常勤講師扱いの養護教諭です。生徒の声に丁寧に耳を傾ける養護教諭は、「なぜそんなに沢山生徒が保健室に来るんだ」と校長に叱責されたとか。来室生徒数が減ったことを誇らしげに報告する養護教諭が褒められるとか。コロコロと教職員の首を挿げ替えるような学校は良い学校と言えるのでしょうか。どうにも怒りが収まりません。【若杉雅代】